
夢世界 —インヴァギート—

馬超むむむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢世界 ―インヴァギート―

【Nコード】

N8892Y

【作者名】

馬超むむむ

【あらすじ】

夢世界『インヴァギート』。そこは夢想者と呼ばれる者たちが眠りに落ちると行き着く謎に包まれた世界。

猥と呼ばれる化物が闊歩する世界で、夢想者たちは生き延びるために戦っていた――――

この作品は私のブログ「ライトノベル修業的ブログ」でも公開されています。最新話はブログのほうで公開されていて、修正をした後こ

ちらに投稿させていただきます。

1-1 インヴァギート（前書き）

今作はフィクションです。

今作の舞台は架空のものであり、実在の人物、団体、その他固有名
称で特定される全てのものとは、一切関係ありません。

1-1 インヴァギート

夢の世界。

ただ眠るだけで行ける世界。誰もが望んだその世界に一部の人々は足を踏み入れ、そして絶望に打ち拉がれた。

視界に広がるのは人類が絶滅した後のような情景。

都市には森林が入り混じり、英知の産物である建物は雑草や蔦に覆われ廃墟同然と化していた。アスファルトの地面には亀裂が走り一部の地面が露出している。

その荒廃とした都市の住人は人間ではない。

全長五メートルを優に超える『人間を主食とする』化物が我が物顔で闊歩し、夢の世界に足を踏み入れた餌を捕食する。

それがこの世界の有様。人間が望んで行き着いた先。人々はこの世界をこう呼んだ。

——『インヴァギート』と。

1

——ここは夢。

——死に至る夢の世界。

亀裂が入ったアスファルトの大地をブーツの靴底が叩く。黒のロングコートをなびかせる少女は、息絶え絶えに喘ぎつつも走り続けていた。

正真正銘の恐怖をもって、肌に纏わり付く汗を拭う暇すらなく。幾度目かの言葉が思考が巡る。

うるさい。

自分の心音がうるさい。自分の呼吸音がうるさい。自分の足音が

うるさい。

それほどまでの静寂がこの地にはあった。

荒廃した雰囲気逗留する地。

周囲には半ばほど地に埋もれ傾斜したビルや、原型の予想もつかぬ瓦礫が点在しており、賑わい以前に自分以外の人間すら皆無であった。

空は陰鬱とした雲が埋め尽くしており、その隙間から差し込むさやかな陽光の柱が、前方に見える城壁に囲まれた都市を照らしている。

それが唯一の希望。

あそこまで辿り着けば助かる。少女を殺す魔の手から逃れられる。ゆえに少女は走る。肉体はとうに限界を超え、精神は磨耗し、呼吸を整える余裕すらなく、しかし生きるために走り続ける。

この夢の世界、とても残酷な夢の世界で生き延びるために。

そんな少女の渴望を嘲笑うかのように、不意に背後から悪寒に襲われた。

彼女の肉体は意志を離れ、自動的に『振り返る』という行為を実行してしまう。

視線の先に化物が佇んでいた。

その全長は七メートルほど。

シルエットは人に酷似している。頭部があり顔があり頭髮があり四肢があり五本の指がある。だが、それは決して人と認めたくない雰囲気纏っていた。

顔には眼球二つと鋭く伸びた鼻梁、口もあり乱杭歯を覗かせている。だがそれで人を同じ外見とはいえず生理的に受け付けない。

唯一、それが人間と違う部分と言えば、肌の表面を覆う鱗と生えた巨大な尻尾。まるで人間が伝説上の生物であるドラゴンを目指した成れの果てといった具合だ。

化物はその爬虫類めいた眼球で少女を捉えると、雄叫びを上げた。大気を震え上がらせる雄叫び。その震えは肉体に伝播し肉体を震

え上がらせ、意志に伝播し意志を震え上がらせる。

「あ、あ————」

何もかも震えていた。

屈服するしかなかった。

気付けば足は止まり、

ただ目を瞠って、

理解した。

ああ、

私、

死ぬんだ。

喰うモノは歓喜の咆吼を上げ、

喰われる者は死を受け入れる。

天敵。

目の前にいるのは間違いなく少女らの天敵である。

夢に住まう者たちを喰らうもの。

少女はその名を記憶に刻んでいた。

猯。

化物——猯は地を蹴りだし俺に向かって走り出してきた。

地が震動する。

硬直していた身体が跳ね上がり、少女の危機意識が蘇る。

（最後まで……抗えっ！）

拳を握り締め己を叱咤した少女は、真っ白になっていた思考を無理に再稼働させ考える。猯の走る速度からして目的地である都市まで逃げ切るのは——無理だろう。ならば決断すべきは一つ。

（仲間がいるの。私には一緒に笑い合いたい仲間がいる——！）

脳裏に浮かんだ仲間の笑顔が少女に武器を握らせた。

腰に添えられた柄。そこから少女の腕程度の長さがある剣を引き抜き、子供のような拙さで走り迫る猯へ煌く刀身に向けた。

何度も戦ってきた。

この天敵と。楽園に住まう絶望と。

少女は猿の目線まで跳躍すると、その恐怖を煽る人間と恐竜を混合したような顔に、剣戟を撃ち込む。

刃が鱗を切断し肉を抉る感触が柄から掌に伝わり、黒い液体が少女の頬に付着した。痛覚は人間よりも鈍感な猿だが、顔面を斬りつけられれば数瞬程度は呻き動きを止める。

無理な追撃は禁物だ。少女は着地すると同時に手近な瓦礫へ身を潜めた。

猿は特別嗅覚が強いわけじゃない。獲物の追跡はその視覚に頼りきりで、生物としての基本性能はそこの野犬などよりも遥かに劣る。ただその巨軀と身体能力を除いては。

いやそもそも生物として見ていいかさえ分からない。生殖器すら見当たらず繁殖行為も判然としない化物が、果たして生物の枠組みに収まるのだろうか――

恐怖を押しやるように、そんな現実逃避気味な思考を巡らせていると地が揺れた。猿が動き出したのだ。あの一撃を受けて足止めできたのは精々数秒というのが少女の僅かな闘志すらも打ち砕く。

（全く厄介な奴……！）

心中で虚勢全開の言葉を呟くが、指から伝達した震えは全身にまで達し、カツカツと奥歯が鳴り響く。

その音で気付かれないか、呼吸の音で猿に気付かれないか、心音で猿に気付かれないか、と思考回路はぐちゃぐちゃに掻き乱れ、再び精神を圧迫する恐怖が奥底から這い寄ってくる。

（いけ、どっかいけ………！！）

一步。また一步。猿が地を踏み締める度震動が少女を襲う。その度に心臓が跳ね上がり、全身が震え上がった。

不意に周期的な震動が訪れなくなった。

突然、空が暗くなる。

荒廃したこの世界は全体的に薄暗い場所が多いが、ここはこんな

にも暗かっただろうか。少女は恐怖に突き動かされ頭上を見上げた。

瞬間、こちらを見下ろす猯と目が合った。

呼吸が止まり、真っ直ぐ伸びてくる巨大な手を少女は見詰めていた。

猯の掌は少女の身体を軽々と掴んで、顔の間近までもってくる。

「……えっ？」

現象は理解できたが、何が起きたのかわからなかった。

猯の巨大な鱗の覆う手が人形でも掴むように少女の身体を握り締めている。万力にでも締め付けられるような激痛が襲い掛かり、肉体の端々からミシミシと奇怪音を上げ始めた。

現状を把握したのは、

口内が見えるほど猯の口が接近したのを見てから。

「そっ、か」

色々な感情が一斉に湧き起こり、少女は何とも言えない苦笑を浮かべた。

涙が頬を伝う。

ふと希望が満ちていた都市のほうへ目をやると、物凄い形相で何かを叫びながら駆けてくる人達の姿が見えた。

「あれさ、私の仲間なんだ」

少女の肌に落ちる巨大な影は徐々に近づいてきていたが、彼女は震える声で言い続ける。

「良い奴らなんだよ。だからお前には喰わせてあげない」

以前宴会中に決めた合図。少女は必死に自分を助けようと走る仲間たちへ向け素早く瞬きを三回した。この意味は――

（逃げて）

少女は笑顔を浮かべ、その笑顔は一秒も経たずして喰われた。

――ここは夢。

——とても残酷な……夢の世界。

1-2 冷徹か激情かの選択（前書き）

今作はフィクションです。

今作の舞台は架空のものであり、実在の人物、団体、その他固有名称で特定される全てのものとは、一切関係ありません。

1-2 冷徹か激情かの選択

「店長、もう一杯頼む」

「店長じゃない。マスターと呼びなさい」

汚れた木製カウンターの上に乗ったグラスを掲げたと同時に、店長——もといマスターである二〇代前後の女性は訂正の声を上げた。身に付けているのはTシャツに似た衣服と、エプロンに似た衣服、そして三角巾に似た装飾品、一見すれば思わず店長と呼ばたくなるラーメン店のおっさんみたいな格好だ。

対して俺の格好は黒を基調としたロングコート。別に好んで着ているわけではないが、目の前のラーメン店のおっさんみたいな格好をしている女性より奇抜ではない。

彼女は嘆息しながら、グラスに追加の液体を注ぎ「三杯目だよ」と言った。

「回復薬を飲んでいるだけで、そんな酔っ払いを対処するような顔で言わなくても……」

「大人の回復薬はお酒。つまりここで出しているのは回復薬でありお酒なんだよ。本当は十代そこのガキに飲ませたくないんだけどね」

はいはい、と俺は適当に相槌を打ち店内を見渡した。

木製の丸テーブルとそこに添えられた同じく木製の椅子が数脚見られ、全体的な印象としては西部劇に出てくる酒場を彷彿とさせるが、店前に悠然と鎮座するマスコットキャラは緑色のカエルだ。

カエル様の働きの見事にマイナス方面に働き、店内には俺以外に人がいない。

あのカエルを見ると何か幼稚なイメージがして、男たちは入りずらいんだよなあ……。かといって女の人にはこの野郎共が集まる酒場みたいな雰囲気は近寄り難いだろうし……。

「なに『あ、この店もう潰れるだろうな。新しい酒場を探しとくか』

みたいな顔してんだ」

「そこまで思っていないけどな……」

それに近いことは思考を巡っていたが。

「そもそもねえ、あんたがこの店に出入りする前までは……もうほんのちよつとだけ客の行き来があっただよ」

「ほんのちよつとねえ」

「あんたがきてからは、他のお客が怯えちゃって全く近寄らないんだよ！　ま、あんたが買ってくれるから売り上げ的には伸びてんだけどね！」

ほんのちよつと、がどれくらいを意味しているのかが窺い知れる。

「夢の世界でまで店の売り上げ心配するってのは疲れないか？」

俺が思わず訊ねてしまうと、マスターは鼻を鳴らし、

「夢の世界でまで化物と命の駆け引きしているあんたに言われたくないね」

「それもそうだな」

苦笑し、俺はグラスに注がれた回復薬を飲み干す。独特の苦味が口内に広がり、それを味わうことなく俺はカウンターに金を置き席を立った。

「忘れたのか？　一杯一〇〇〇ケロだよ。一杯分多い」

「いつも面倒になってる礼だよ。受け取ってくれ」

「毎度あり」

マスターの声を背に俺は店を出る。

入り組んだ路地を抜け石畳の通りに出ると、飛び交う野太いだみ声が耳に届いた。

現実世界で言うところの祭りのように露店が並んでおり、上は六〇代、下は十代まで老若男女の人々が声を張り上げていた。

この場面だけ切り取れば、多くの人が笑い栄えている夢の世界だと思い込むだろう。

事実、ここは人々が眠りに落ちた時に訪れることが可能な夢の世界なのだ。

眠ると同時にこの世界に目覚め暮らしてゆく俺たちは、人間という名を捨てイデアリスタ夢想者として生きている。

インヴァギート。

誰が名付けたかは知らないが、この夢の世界はそう呼称されている。

この世界ではあらゆる現実の建物は廃墟と成り果て、一部のモノ——信号や標札など——は壊廃。それ以外のモノは全て消滅し、そして猥という化物が闊歩している。

しかし唯一ここだけが猥という名の化物に遭遇しない安全地帯なのだ。理由は現在究明中であるが、とにかくにも猥はこの一帯に近寄ることはできず都市内の夢想者は襲われる心配もなく店を開いたりできる。

ならば都市内で不自由なく暮らしていけるかという答えは否だ。現実世界と違い汚れても時間が経てば自然と清潔な状態へと戻り、睡魔も襲ってくることはない。しかし耐え難い空腹は訪れるため、この世界の住人は自然と苦しまなくて済む金を必要とする。

俺がここに訪れたのは三年前。中学一年生になって一週間も経たぬ春だった。訳も判らず彷徨っていた俺は現実の知人と出会い、夢の世界——インヴァギートの説明を受けここでの生き方を学んだ。商人として他人と戦い稼ぐか、戦士として化物と戦い稼ぐか、何者にもならず乞食として耐え忍ぶか、その三択しかこの世界で生きる方法は存在しない。

他人との接し方も特別上手くなく、かと言って卑しく誰かに乞うことを良しとしない俺が選んだのは、戦士として化物と戦う道だ。今でもそれは過ちだとは思っていない。そう、俺は猥どもを必ず

「おい、その兄ちゃん。良い剣が入ったんだぜ、見てけよ」
露店が並ぶ道をぼーっと歩み進んでいた俺は、不意にそう呼び止められ視線を向ける。

ショーケースなんて存在しない。祭りの露店がマシに見えるみす

ぼらしい店に、現実では銃刀法違反間違いなしの銅剣が吊るされていた。……値段は二万と三〇〇〇ケロ。

この世界での通貨はケロだ。感覚的には単位が円からケロに変わった程度だが、こういった武具の類の相場はすぐに変動する。

俺は半目で店主である三〇代半ばと思われる親父を見た。

「ボツタクリか？」

「かっー兄ちゃん良い目してるねえ！」

俺の様子からボツタクリだと確信しているのを悟ったのか、親父は愛想良い笑みを浮かべる。

「そうだ、親父。これを買って取ってくれないか」

俺は背中に吊るしていた細身の剣を店主に手渡した。店主はしばらく刀身を見詰め、次に鏢、柄と移ってゆき、もう一度刀身を――今度はルーペのようなモノを使いじつと見定める。

「兄ちゃん、いくらがお望みだ？」

「あんたならあの銅剣、いくらで買い取る？」

質問を質問で返すと親父は渋い顔をして、

「本当のところを言うと、一万と少しかねえ」

「じゃ、ちゃんと表札を取り替えろよ。それとその剣の買い取りは銅剣と同じでいい」

「マジかよ兄ちゃん！ 太っ腹だねえ。三万でも惜しくなかったよこりゃあ」

そりゃ良かった。そう言い、俺は金銭を受け取って店を離れた。

丁度剣が荷物になって邪魔だったし。手ぶらのほうが身軽で良い。と俺が首をゴキゴキと鳴らしながら背を伸ばした瞬間、

「妙なところで太っ腹だね。ヒデオ」

横合いから放たれた呆れ声に、ヒデオこと俺は振り向いた。

そこに佇むのは女――に見えるほど線の細い、中性的どころか女性的な顔立ちの『少年』であるリュウだった。彼は俺と似たデザインの白を基調としたロングコートを身に纏い、肩で切り揃えた髪を微かになびかせながら、手に持った書類を突きつけてきた。

「ビデオ、集会サボっただろ。また僕が代わりに謝ったんだぞ」

「その文字いっぱい紙は？」

「今日の集会で出た議論をまとめておいたんだ」

律儀だなお前も。と俺が嘆息混じりに言うと、リュウは目尻を吊り上げ「だいたい……」と説教を始めた。どうやらリュウさんはお冠のようだ。俺は頭を掻きながら、

「あー……悪い。ああいう堅苦しいのはどうも苦手でさ」

「言い訳はいい！」

「……そのギャグ、結構いけるぞ。でも言い訳はいいわのほうがつとー」

「僕のこの顔がギャグ言ってるような顔に見えるなら眼科行ってこいー！」

全くもう、と腰に手をあて怒りと呆れをない交ぜにさせた溜息を吐くリュウ。

「僕とビデオに任務がきてるんだけど。明日行こう予定だから、いつもの店に行こう」

いつもの店とは、つい先ほど俺が出て行った緑色カエルがマスクットキャラの酒場のことだ。一度出た店に行き直すのは少し気が引け、

「ここで良いだろ。どうせ俺たちの話になんか誰も聞き耳なんか立てないさ」

生真面目なリュウは思案顔を浮かべるが、「時間も時間だからね」と了解の意を示した。

時間。不意に俺はこの都市で最も高く聳えている時計塔を見やると、時計と秒針は午前四時一〇分を示していた。普通の若者が起きているわけもない時間帯だ。

今現実の俺たちは眠っている。この世界は意識が途絶したさいにのみ行くことが可能で、現実の俺たちが覚醒すれば俺たちはこの世界から去らねばならない。

俺とリュウは高校生という身分なため、起床時間は必然的に決ま

ってくる。俺は七時起床なためあと俺がこの世界にいられるのは三時間のみということだ。

「あ、僕は今日用事があって五時半に起きるから。よろしくね」

俺が時計を見ていたことに気付いたのか、不意にリュウが言うてくる。

「俺と眠った時間は一時間も変わらないはずなのに、起床時間は一時間半も違うとはこれいかに」

「ヒデオがギリギリなだけだろ………って、とにかく時間がないんだからさっさと説明させてよ」

リュウの言葉に頷くが、さすがに道のと真ん中で話し込むわけにもいかず、俺たちは店と店の合間に生まれた路地へ入る。

一瞬だけ周囲の気配を探ったリュウが口を開いた。

「人型の獺が現れたらしいんだ……」

獺。の一言が出た時点で冗談でないことは理解できたが、その言葉の真意を測りかねた。

「どういう意味だ？」

人型の獺。

そんなもの『外』には腐るほどいる。

この夢都市は安全地帯だからこそ獺に襲われずに済んでいるが、ひとたび境界線を越えればあの人のシルエットをもった化物に遭遇する確率は生まれる。

「ああ、違うんだ。人型っていうより、人そのもの。全長が一メートル半程度の、女の子の外見をした獺が現れたらしい」

より意味がわからなくなった。

「それは獺じゃなくて、普通の女の子だろ。お前、大丈夫か？」

「うあーだから違うんだって」

リュウは煩わしそうに言葉を選びながら、丁寧に説明してくれた。最初の発見者――いや理解者はその少女に付き纏っていたストーリーの男性。

男はインヴァギートにいる間、ずっとくだんの少女に付き纏い監

視していたらしい。しかしある日、恐ろしくなって俺らが所属する義勇夢解析兵団に助けを乞いにきたのだ。

『あの女は人の姿をした猯だ！　だって——』

「ずっとインヴァギートに居続けているから」

リュウが男性の言葉を再現し、俺は思案した。

インヴァギートは夢の世界。

この世界に居続けられるのはあくまで『意識が途絶している間だけ』だ。意識の途絶には睡眠以外にも気絶が含まれるが、どちらも時間制限があるため永遠にインヴァギートに居続けるわけではない。

「何かしらの例外はあるかもしれない。けど……」

リュウは強張った表情で言った。

「猯なら……あいつらなら、あり得る。十二分に」

俺はそれに頷いた。

あの人型のシルエット。小型化すれば猿やゴリラよりも人間の姿に近い生物へとなるだろう。小型化し人間の姿をとる可能性は想定して当然。奴らはそれほどまでに、奇怪な行動や謎の生態を披露しているのだ。

そして最悪の事態を想定するのが俺たち義勇夢解析兵団の——いや夢想者の常識だ。

猯に喰われれば死ぬ。

これは既に証明されたことなのだ。

猯に喰われ目覚めた者は二度と眠ることができず、八時間以内に何らかの理由により死亡する。例えば事故で。例えば急病で。例えば通り魔にあつて。

千差万別な理由により——しかしインヴァギートで死亡したという共通点をもって、インヴァギートで死んだ夢想者は現実においても死亡する。

悪夢では終わらない。だから常に最悪の事態を想定し、自分の命を守らねば生き延びることはできない。それがこのインヴァギートの仕組みなのだから。

「その調査に行け、と。我らが義勇夢解析兵団の団長殿は仰ったわけか」

「その皮肉っぽい言い方、誰かに聞かれたらどうすんだよ」

情けない声で言うリュウを無視して、俺は独り路地から出た。

「ちょ、ちょっと待ってよヒデオ！ どこに行くんだよ！」

「その人型獏とやらを偵察しにな」

「この任務は明日で良いって最初に言わなかったっけ！？」

「これ、借りるぜ」

俺はリュウの胸元から拝借したくだんの人型獏の顔写真を見せ、制止の声を無視して跳躍した。

現実の世界では到底叶わぬ二〇メートル近い跳躍。背の低い建物ばかりしかないことから、視界を遮るものがなく眺めは最高だ。

だが外の世界を拝むにはこの程度では足りない。なぜならこの小規模な都市を五〇メートルに及ぶ無骨な壁が囲んでいるからだ。

あの城壁は獏の侵入を阻むものではない。獏がその気になればあの程度は破壊できるはずで、だから南側と北側に用意された門は常に開いているのだ。

あくまであの壁は目安であり最後の判断をさせるモノ。

この境界線を踏み越えれば死ぬ可能性があるぞ、と。

都市外へ出る者の覚悟を問う壁なのだ。

「……と」

刹那の滞空時間で流暢に見入っているわけにもいかず、俺は姿勢を正しながら手近な建物の屋根に着地。屋根上を歩いたりする行為は本来ならマナー違反で見つかったらお説教が飛んでくるが、今はこの夢都市の中心にある唯一高い尖塔——時計塔へ素早く行きたいので致し方ない。

幾つかの屋根を飛び移り、ようやく時計塔を見上げられる位置まで辿り着くと、俺はその灰色を基調とした年季の入った時計塔を仰ぎ、最後の跳躍をした。

時計塔の頂点まで無事到着し一息吐くと、俺は目を凝らして眼下

に広がる街並み、そこに行き交う人々の顔を見定めてゆく。

この安全地帯——夢都市に滞在する人数は二〇〇〇人ぐらいだろう。大して規模が広い夢都市ではなく、目を瞠るものと言えば優秀な武具店があることと義勇夢解析兵団の本部があることぐらいなのだが、

「そのわりに人は多いんだよな……」

インヴァギートは全国を網羅しておりその気になればこの世界で日本一周も可能ではある。安全地帯もここ一つというわけじゃなく、より規模の広い夢都市もあればより規模の狭い夢都市も存在する。

比べてしまえばここの夢都市は小規模のほうに部類されるが、安全地帯の面積にしては住人が多く活気に満ちていた。

「悪いことじゃないけど……うん、いないか」

ぼやきつつも屋外を歩く夢想者の顔を全員チェックした俺は、リュウが持っていた人型模疑惑の少女の写真を一瞥し、一致する顔いないことに肩を落とした。

そういやこの方法じゃ宿に泊まれてたら見つけれられないなーと己の作戦ミスに気付きつつも、希望的観測で都市外のほうへ目をやる。

視力は現実とは桁違いで、目を凝らせば数十キロ先に描かれている米粒みたいな絵の評価だって出来る自信がある。もちろんそんな馬鹿なことを試したことはないが——

そこで俺の思考を中断する戦慄が駆け巡った。

都市外南の方角。廃市街地の傾斜するビルを遮蔽物とし身を隠す人影が二つ。

それを探すように付近をうろつく全長一三メートル級の猊。

「—————っ!!」

気付けば俺は時計塔から跳躍し、宙へと身を投げ出していた。

ゴオオオオという風の低い唸りが鼓膜を震わし、俺は手近な屋根に猫の如く四肢で着地した。付近の路地をうろついていた男が、「おい何やってんだ!」と咎める口調で言ってきたが、

「悪い、それ貸してくれ」

路地に下り駆けると、男の背中に吊るされていた戦斧をすれ違いざまに奪い取り、俺は男の罵倒を背に走る。

通りを出て人込みの間隙を縫うように走り、屹立する南側の門前まで辿り着く。

圧倒的威圧感に一瞬俺は足を止め、

「……………いくぞ」

己の言葉に俺は頷き、観音開きの扉を潜り通った。

空気を切り替わる。

荒廃した胸の詰まる空気。都市内とは打って変わって周囲には殺風景が広がり、所々見える錆びた標札や折れた信号機、一枚の葉すらない枯れ木などは映画や漫画などのフィクションで見る『死んだ風景』のようだった。

身を竦ませる雰囲気振り払い、俺は亀裂の入ったアスファルトを蹴り出し疾駆する。

俺の脚力は現実のそれを遙かに上回っている。今の速度なら名馬と競争したって負ける気がしない程だ。あの程度の距離ならば――一分も経たずして辿り着いた。

いや遭遇したと言ったほうが適切だろう。

半ばで折れた廃マンションに手をかけぬっと姿を現したのは、先ほど目にした全長一三メートル程度の猯だ。

嫌に生物だということを強調するピンク色の歯肉と乱杭歯を覗かせ、唾液らしき粘液を口の端から垂れ流す化物。爬虫類のそれに酷似した眼球はギョロリと俺を捉え、嘲笑うように口角を吊り上げた。そのかつて見たような表情に、血液が沸騰するような『怒り』が俺の底から湧きあがる反面、肉体を離れ先鋭化した意識は冷静に猯の動きを捉え続ける。

猯は子供が人形を乱暴に引っ掴もうとするように、屈みながらその巨大な掌で俺を捕らえようとした。しかし俺は横っ飛びにそれを躲し、見ず知らずの男が『貸してくれた』戦斧で猯の手首に一閃を

放つ。

膨大な赤黒い鮮血が地を染め、猯は大気を震わす絶叫を上げると膝から崩れ落ちる。

猯の急所は人間と同じ箇所が多数存在する。はなはだ本意ではあるが猯と人間は似通っていることを認め、崩れ落ち膝立ちの姿勢でいる猯の肩に乗り、人間でいう頸動脈の部分に戦斧の煌く刃を走らせる。

ホースから噴射される水のように黒い液体が噴き出る。これが猯の血液、黒血である。

猯は絶叫を放ちながらも、一撃で人間の肉体を拉げさせる巨木のような腕を無茶苦茶に振るい、肩に乗る俺を追い払ってきた。

俺は肩から地に着地すると同時に膝を屈め、屈伸の要領で猯の視線まで跳躍する。

猯と目があった。一瞬だけ恐怖の色がその爬虫類染みた眼球に走ったような気がして、

今度は俺が口角を吊り上げながら戦斧を構え、その眉間に全力の一撃を叩き込む。

黒色の鮮血が薄暗い宙に煌く。

俺が右足で着地した直後、猯が仰向けに倒れ伏す震動と轟音が大気を震わした。

俺が更なる追撃を加えようと柄を握り直すと、猯は気化するように朽ち消滅を始める。

俺は首を捻った。猯がこの程度で死ぬはずがない、既に手負いだっただのか……？

思い浮かぶのはあのとき見えた二つの人影。おそらく善戦はしたが殺すまでに至らず逃走を決意した、というあたりだろう。

「さてと」

呟き、骨も残らず死滅した後に残ったもの――硬貨と細身の剣を拾った。他にも防具や衣服が落ちていたが、それは使いものになりそうにないので放置しておく。

インヴァギートはまるでRPGの世界のようだ。とかつて共に戦った友人は言っていた。

人々が栄える都市に化物は出現せず、魔法的異能の力も存在する。化物を倒せば金や道具が手に入り、そこらを歩けば金が落ちていることで当然のようにあるくらいだ。

だがそれは決してプログラムじゃない。

獺は人間以外を消化する器官がないのか、はたまた消化する器官自体ないのか、夢想者たちを捕食したはいいがその捕食した夢想者たちが装備していたものは内部に残るらしく、一定以上溜まるとそれを吐き出す。

獺が死滅した後に残った装備品らは喰われた夢想者のものであり、そこらに落ちている装備品や金も獺が喰って残留したものを嘔吐したに過ぎない。

剣と魔法の世界とは、誰もが一度は望んだ夢の世界はこんなにも残酷だった。

「それを拾って生活の足しにする俺も残酷なんだろうな……」

そう呟いて自嘲気味に俺は笑い、意識を切り替え右斜め前方にある瓦礫に感じる気配二つに声をかけた。

「変に逃げずに息を潜めていたのは正解だったな」

俺の言葉に応えるように、瓦礫の影から姿を現したのは一人の少女。俺はその姿を見て反射的に剣の柄を強く握り締めた。

印象的なのは長い睫毛に縁取られた気丈そうな――そのわりにくりくりっとしている――瞳と、肩甲骨辺りまで伸びる色素のない半透明な髪。そして装飾品の少ないこの世界では珍しい帽子だ。

服装は典型的な女性軽装備であるジャケットとミニスカート（当然下にはスパッツみたいなものを着用している）で、そこから伸びる四肢は細く肌は冗談のように白い。

年齢的に俺と大差ないだろう。もちろん彼女が同じ人間、夢想者であればの話だが。

その外見はリュウから拝借した写真に写るくだんの人型獺そのま

まだだった。ストーカーができたことも頷ける美麗な容姿だ、見間違いないということもない。

「助けてくれてありがとう、『無剣の剣師』」

俺の警戒心を察したのか、交友的とは言い難い棘のある口調で彼女は言ってきた。

彼女は視線を俺から瓦礫のほうへ移す。

確かもう一人いたはずだ。まだ怯えて出てこれないのだろう。俺はそちらへ歩み寄り、瓦礫のほうに回り込んだ。

見れば蹲り震える女性。こちらは俺よりも年上っぽいジャケットに鎧を纏った女性だ。彼女は完全に戦意を喪失し、垣間見えた瞳は虚ろだった。

そしてぼつりと、

「返してよ」

「……」

その言葉が聞こえなかったはずはないだろう。よせばいいのに、人型模疑惑の少女は震えるもう一人の女性の肩に手を置き「もう大丈夫」と言いかけ――

パシッ、と軽い音とともに弾かれた。

「知ってるんだから！ あんたも猥なんでしょっ、返してよ……彼を……！」

俺は我が耳を疑った。

「おい。こいつが猥だって、何で思うんだ」

怒りに顔を歪めた少女は俺のほうへ振り向き、

「彼から聞いたのよ。人型の猥がいるって、都市内も安全じゃないって。私を連れて逃げ出そうとしてくれたのに……」

都市外へ無防備に出て猥に襲われ、そこを何らかの理由により模疑惑少女が助けたということか。俺は模疑惑少女のほうへチラリと視線をやるが、彼女はきつく口を結び拳を握り締め己の侮辱に文句一つ返さず耐え忍んでいる。

その『彼』とやら義勇夢解析兵団の未確認情報をどこで入手した

のかは知らないが、どうやら流暢に詰問している暇はないようだ。
猥が遠くから歩いてくる微震動を感じた俺は、泣きじゃくる女性の腕を掴み強引に立ち上がらせた。

「話しは都市で聞く。いくぞ」

俺は身を翻し一步を歩み出した瞬間、女性が腕に縋り付いてきた。

「その服、義勇夢解析兵団なんでしょ。ならこの化物を殺してよ！
さっきみたいに殺してってば！ こいつはあいつらの仲間なのよ！」

ヒステリックな金切り声を放つ彼女を一瞥して、

「話しは都市に着いてから聞くと云っただろ。移動中に無駄口一つ叩いたら、お前はそこで置き去りにする。『彼』と同じ目に遭いたくないなら黙っていることだな」

彼女の言う彼がどんな目に遭ったのかは想像がつく。俺だって何度も目にしてきた。猥の巨大な手に握られながら、その乱杭歯で噛み千切られ租借されるその瞬間を。

この世界は残酷だ。

誰もが笑っていられる夢の世界じゃない。

だから非情じゃなきゃ、残酷じゃなきゃ、生き延びることはできない。

嫌気が差すぐらいに冷徹な思考を巡らしている俺は、更に嫌悪感に陥ることも厭わず涙を流す彼女へ言った。

「死にたくないなら冷徹でいろ。生きる道だけを見据えるんだ」

俺は沈黙で応える二人を引き連れ、都市へと引き返した。

1-3 狼の策略（前書き）

今作はフィクションです。

今作の舞台は架空のものであり、実在の人物、団体、その他固有名称で特定される全てのものとは、一切関係ありません。

1-3 狼の策略

都市へ戻った俺と女性二名は、都市中心の時計塔——それが備えられた小麦色を基調とした廃高校、義勇夢解析兵団の本部へと訪れ、二人は義勇夢解析兵団の人間に『事情聴取』されるため別室に移動した。

校舎内部はほとんど空っぽの状態で、俺が呼び出されやってきた保健室もベッドの一つすらなく、ただ真っ白な部屋にぽつねんと椅子が鎮座するだけだ。そこは既に一人の男性が腰を下ろしているから定員オーバー、ということであは手近な壁に背中を預け腕を組み、ジロリと横目で椅子に座る男を見やる。

「で、あの二人の尋問は終わったのか？」

俺のと細部のデザインが違う赤のロングコートを着た二〇代前半の優男、義勇夢解析兵団の団長であるウルフは独特の薄ら笑いを浮かべ、

「尋問なんて酷いですねえヒデオくん。私がそんなことをやるような人間に——」

「思うし見える」

俺が無然とした表情で即答すると、ウルフは作ったような困惑顔を浮かべ「私はそんな酷い人に見えるなんて心外ですねえ……」と漏らす。

「冗談はいいから本題に入れよ。俺もそう暇じゃないんだ」

「集会をサボっておいてよく言いますねえ、まあいいでしょう。私も暇というわけではありませんし」

足を組みその上に掌を重ね、ウルフは俺のほうへ視線を寄越してくる。

「結論から言いますと、彼女が人型の猥なのかは未だわかっておりません」

「だろうな」

半ば予測していた返答だ。一〇分やそこらで真相が解明していれば獺の生態などとうに調査し終えている。

「義勇夢解析兵団の本部団長として情けない限りです」

顔を伏せ本当に言葉通りの感情が見える表情を作って見せるウルフ。いい加減三文芝居はやめてくれ、とつい口に出しそうになるが一応相手は年上なの自制しておく。

「善人市民から徴収する軍の犬である俺たちが、情けないも糞もないだろ」

義勇夢解析兵団は義勇連合軍から生まれた派閥の一つである。

当初の軍は勇士を募り夢都市に住まう人々の幸せを願う小さな兵団だったと聞く。しかしいつしか人数は膨れ上がり、当初の意志は忘れられ利己的な思惑が蔓延る軍となった。それと似通った軍は他の地域でも発生し、その軍らはある日集結し義勇連合軍と名を変え、今の『夢想者に幸せを』という偽りの旗を掲げる同床異夢も甚だしいう軍が完成してしまったのだ。

今の軍は徴集を始めたとした不当な権利の主張が激しく、見事な嫌われ者と化している。しかしケロ硬貨の発行権限も完全に軍の一存となり権力は増すばかり。義勇夢解析兵団はまだマシなほうだが、名乗って良い顔をされることは少ない。

「ま、本部が頑張らなきゃいつかこの派閥すらなくなりそうだしな」本部と言えば聞こえは良いが、支部なんて数十人程度（酷い場所では数人）で形成されていて、数ある派閥の中でも義勇夢解析兵団は解散の危機に瀕しており、本部も薄汚い校舎を占拠して作戦会議やら何やらやっているのが現状だ。

その活動方針はこの世界、インヴァギートに無数とも言えるほど存在する謎の解明。目下最優先で調査が進められているのは俺たちの天敵である獺の生態調査だ。

どこから生まれるのか内蔵にはどんな器官があるのかいかに繁殖するのか……などなど、数え上げればキリがないその生態を調査し、少しでも夢想者の生存確率を高めるのが俺たち義勇夢解析兵団の役

目だ。

最近はとくに目ばしい成果を上げていないため、ウルフ個人としてはここで人型猿の存在を証明または否定するという功績を示しておきたいところだろう。

「で、なんで情報は漏洩していたんだ」

「どうやら最初に気付いたストーカー男と関わりをもつ男性が、その話を聞いて彼女と一緒に逃げようとしたらしいですね。そして猿に襲われ喰われた、と」

その光景は容易に想像できた。容易に想像できるほど、俺は猿が人を喰う瞬間をこの眼球に収めてきている。

「まあ頑張ってくれ。連行しただけで俺の任務は終わりだからな」

胡散臭い奴と話す趣味のない俺は、早々に話し合いに決着をつけ退室しようとする、「まあ待ってください」とウルフのどことなく人を小馬鹿にした声が俺を制止した。

「なんだ？ お前に言いたい文句はあっても、聞きたい話はそうなんのだが」

俺がつっけんどっけんと言うと、ウルフは笑顔で頷き、

「文句とやらを聞いてもいいですよ」

「制服を変えろ」

即答すると、ウルフの笑顔が硬直した。

特徴的なデザインのロングコート。なぜか義勇夢解析兵団の制服として指定されているが、俺はあまり良く思っていない。軽防具としての耐久性は申し分ないとは言え、この裾の長さは完全に無駄の部類だ。ロングコートじゃなくてジャケットで充分じゃないかと。もしこの裾の部分を猿に掴まれたらどうするんだ。

「ぼ、防寒性に優れているでしょう……」

硬直した笑顔のまま、ウルフがそう絞り出す。

「いやインヴァギートじゃ四季なんてないし。確かにいつも肌寒い感覚があるからコートの意味はあるが、ジャケットでも充分だろ」

「いえいえ。防寒性を舐めてはいけません。万が一にも寒さで指の

動きが鈍り剣を振るう動作が一秒でも遅れれば生死に関わります。それに義勇夢解析兵団は他の皆に安堵を与える役割があり、強者はそれなりの強者たる格好をし弱者へ安堵を与えねばならないのです。ロングコートはジャケットと違い、その裾の長さで強者の威圧感を放っています。そもそもロングコートの歴史を遡ること……」

「要するに？」

ウルフの熱弁を遮って俺が問い掛けると、ウルフはニッコリ微笑み、

「格好良いからいいじゃないですか」

結局デザイン重視かよ……。

こいつが団長を務めている限り、この制服が変更されることはないだろう。

まあ性能面で文句があるわけではないので別に構わないのだが……。しかし一体こいつのロングコートに対する情熱はどこから湧いてくるんだ。

「ところで任務の話がしたいのですが」

不意に茶化した雰囲気霧散させ、ウルフは言ってきた。

俺はウルフの切れ長な双眸を見据え返し、自分でも驚くほどの低い声で問うた。

「それは猥に関することだろうな」

ウルフはニッコリと微笑み首肯する。

「もちろん。引き受けてもらえますね」

「……因みに内容は」

「守秘義務というのがありますからねえ。任務を引き受ける人にも教えるような極秘任務、と言えは少しは伝わりますか？」

「……」

俺は猥に関する任務は遮二無二引き受けることにしている。だがそれを利用して無理を強いられ『もうこいつの口車には乗らないぞ』と決意したことは何度もあった。

こいつの笑顔は信用しちゃいけない。悪名高い詐欺師の笑顔ぐら

いに、お母さんが笑顔でお年玉は貯金しといてあげると言ってくるぐらいに、信用してはいけない。

「あの……なんか私に対しずいぶんと酷いこと考えてませんか？」

「貯金貯金言って、どうせ返すつもりはないんだろ俺のお年玉……」

「何の話ですか!？」

俺はしばらく顎に手をやり考え耽る。だがいくら思考を巡らしたところで、所詮俺は獏と戦うことしか能がない男だ。答えは一つしかない。

「わかった。やろう」

「さすが『無剣の剣師』。任務の内容ですが……」

言いかけたところで控えめなノックが響く。ニヤリと怪しげな微笑を浮かべたウルフが「どうぞ」と声をかけると、保健室の引き戸が開かれた。

「失礼します」

「丁度良いタイミングですね」

入室してきたのはあの人型模疑惑の少女。彼女は俺を見るや否や顔を強張らせ、ウルフへと視線を移す。

「あの、これはどういう……?」

「いやあ彼が引き受けてくれたところなんですよ。ホントにタイミングが良い」

嫌な予感が「きたよ!」と声を張り上げながら俺に向かい手を振りながら走ってくる。まさかこいつ……。

「今日からヒデオくんとミカさんは一蓮托生のパートナー同士ということで」

「「ちょっと待て!」」

俺と人型模疑惑の少女——名前をミカというらしい——が同時にウルフへ詰め寄る。

「どういうことよあんた! 胡散臭い顔と声してるなーと思ったらやっぱり胡散臭いことしてたのね外道! あまりに人を騙しそうな感じだからむしろ人を騙さないのかと思っちゃったじゃない詐欺師

！
」

「また騙したなウルフ！ お前はいつつもいつつもニヤニヤ笑いしやがって、そんなんだから道を訊ねた瞬間にナンパだと誤解されるんだ顔面公共わいせつ罪！」

が————つとまくし立てる俺たちに、ウルフは「まあまあ」と軽く身を引きながら宥めるように言う。

「ヒデオくんは猥に関することなら何でも、ミカさんは自分が猥じゃないと証明できれば何でもいい。そう言ったのは他でもないあなたたちですよ。あまり私を悪者扱いされても困りますねえ……私ナイーブですから。自室で布団にこもりながら泣くタイプですから」
ウルフは肩を竦めながら、しれっと言い放つ。

「ともかく両者の意見を取り入れたのです。異論はありませんよね？」
」

もう二度とこいつの笑顔は信用しない。

そう幾度目かもわからぬ誓いを立て、俺は盛大に溜息を吐くしかなかった。

1-4 命の洗濯（前書き）

今作はフィクションです。

今作の舞台は架空のものであり、実在の人物、団体、その他固有名称で特定される全てのものとは、一切関係ありません。

1-4 命の洗濯

「災難だったねヒデオ」

綺麗に塗装された青のベンチに座り、太陽が爛々と輝く広大な空を仰ぎながら俺が愚痴をこぼしていると、隣に座るリュウ——現実での名を安心院龍之介という彼はそう同情の声を漏らした。

夢の世界から現実の世界へ帰還した俺たちは、高校生という身分であり今日が平日であるため、例え眠っている最中にどんな不幸があろうと登校せねばならなかった。

現在は昼休み。梢で小鳥が歌声を奏でる中庭のベンチで小休憩と洒落こんだはいいが、俺の唇が紡ぐのは夢世界で起きた不幸の愚痴ばかりだった。

「悪いな龍之介。付き合わせて」

俺は隣の龍之介へ視線を移す。

インヴァギートで見た容姿と変わらぬ、男子のブレザー制服を着ていても女性に見えるという特徴的な外見の龍之介は、「別にいいってば」と首を振る。

「それより坂上ヒデオ（さかがみ ひでお）くんが確り集会に参加したほうが嬉しいんだけどな」

「前向きに検討します」

龍之介の軽口にそう返し、俺は再び溜息を吐き空を見た。

現実の世界は五月の二十日。春の暖かい風と陽光が俺を包み込み穏やかな気分させてくれる——のは良いが、それでも包みきれぬ不幸に見舞われ何とも複雑な気分である。

あの後、ミカとかいう人型模疑惑少女は必死にウルフと口論を交えていたが、俺が心中で少なからず応援する甲斐もなく彼女は僅か五分でやりくるめられ納得してしまった。まあ俺は既に無駄だと悟

り戦いもしなかったのだが。

というわけで、今後の俺の活動にはミカというパートナーが付き纏う。

ウルフ氏曰く。

『もしホントに人型猿なら常に最強の戦士を傍に置いておきたいし、違うなら皆の印象を操作するために同胞である猿を多く殺すことで彼女は仲間だと言い張れますからねえ。というわけで二人で頑張ってください』

ともっともらしく聞こえる理由のためらしい。

要するにミカの面倒は全て俺に放り投げたということなのだが、確かに猿関連の任務であるため俺も強くは言えなかった。というか言っても他の戯言でやりくるまれるのがオチだ。

「あの団長様、一番権力を与えちゃいけないタイプの人間だろ……」
「確かにやり手だよねウルフさん」

本職は詐欺師に間違いない。それともあいつは大学で嘘をつく方法でも専攻しているんだろう。

「確かあいつ、こっちじゃ大学生やってるんだよね？」

「団長をあいつ呼ばわりって……まあ、うん。確かそう言ってた」
インヴァギートに住む者たちには当然、それぞれ現実の姿がある。

『無剣の剣師』こと俺はおおかみがないそつや高校一年生。リュウだって同じ高校の一年生だ。ウルフこと大神宗谷は大学生らしい。

大神宗谷のように偽名を名乗る者もいれば、俺たちのように下の名前をそのまま名乗ったり端折ったりして名乗る者もいる。うっかりフルネームを教えてしまう者も少なくない。もっと言ってしまえば現実とインヴァギートで性格が豹変する者もいた。

誰もが何かしら、インヴァギートとは別の顔をもっているのだ。だがこの現実でインヴァギートのことを知っている者はごく僅かしい。

なぜならインヴァギートでの記憶は一部の者を除いて引き継げないからだ。

夢の内容を全て覚えている人は少ない。インヴァギートの記憶は夢でそのような光景を見た――程度にしか引き継げないのが判明している。

だから世間はインヴァギートという世界のことを知らないし、公表もされていない。

例えばインヴァギートで大切な人を失ったとしても、一度目覚めればその記憶は既に夢の一部として淘汰されるのだ。

それがあの残酷な世界より残酷なところ。

二つの世界の記憶を共存させる場所は唯一インヴァギートのみ。

インヴァギートでは現実の記憶も引き継げるのだ。しかしそれがより残酷で、大切な人を失ったことを忘れるのが嫌で目覚めることを拒絶する者もいた。

残酷な世界なのに。ずっと居たいと思わせる。

とても残酷だ。

そんな残酷な世界のルールに抗う人間が、俺たち明晰夢者^{ルシッダー}。

インヴァギートでの記憶を現実に取り継ぐことができる者たちのことだ。

現在インヴァギートの住人は一〇万人に及ぶ。そのなかで明晰夢者は全体の一〇〇〇分の一、一〇〇人程度。

こうして俺が龍之介相手にインヴァギートでの不幸を愚痴にするということは、とても異例なこと――あるいは幸福なこと――なのだ。身近に同じ明晰夢者がいたということだけで奇跡に近い。

もし俺が明晰夢者でなければ、俺はあの世界で感じた怒りも忘れただのうのと生き、インヴァギートに戻る度にそんな自分を嫌悪することになっていただろう。

なかには現実でもインヴァギートについて考えなければならない、と明晰夢者であることを不幸に思う者もいるが、俺はそうは思わない。

この感情を、一時にしろ消し去ることに強い嫌悪感を覚える。
獏。あの化物を一匹残らず殺し尽くしたい。

その衝動を、その根源を、忘れることなんて――

「どうしたのビデオ？」

物思いに耽っていた俺を、龍之介の声が呼び戻した。

「あ、ああ……少し考え事をな」

「考え事？ ああミカさんのことね。僕にはわからないなあ、でも人間だったとしたら辛いだろうね」

龍之介は誤解していたがあえて俺は訂正せず、

「獺でもないのに疑われるのは確かに辛いな。俺だったら疑惑をかけた奴を半殺しにする」

龍之介は「違う違う」と苦笑する。

「確かにそれもあるけど、僕が言ったのはあの世界、インヴァギートに閉じ込められることだよ」

俺は龍之介の言わんするところに気付いた。

ミカという少女は消えないからこそ、現実に戻る様子がないからこそ獺と疑われている。それはつまり、現実に戻れずインヴァギートに閉じ込められているということだ。

俺とそう年の頃も変わらない少女が、残酷な世界で生きるために戦い続ける。平穏とは縁遠い天敵が闊歩する世界で。

もしそうならば俺は出来る限り彼女の負担を軽減してやるべきだ。優しい言葉をかけ、ともに戦い、彼女が一刻でも早く現実の世界に戻れるよう力を貸す。

だがもし、彼女が獺だというならば。

俺はきつと――

「そろそろ教室に戻るか」

その思考に決着をつけ、俺はベンチから立ち上がり背筋を伸ばす。
「うん、そうだね。ところで――」

昼休み終了五分前を告げるチャイムを挟み、龍之介は傍らに携えたお弁当を持って苦笑しながら言ってきた。

「お昼ご飯をあと五分で食べる自信ある？」

愚痴はほどほどにしよう。俺は心からそう思った。

学生の仕事である勉強を終えて、俺が一人暮らしライフを謳歌する小汚い二階建てアパートに帰宅した頃には陽はさびんと傾いていた。

六畳一間の安アパートと言えばみすばらしいイメージが付き纏うが、住んでみれば案外慣れてくるものだ。六畳一間でもわりと充分で、ユニットバスも付いているし、何より家賃が安くて貧乏学生には大助かりである。

俺は素早く入浴した後、最寄のスーパーで半額弁当を入手。宿題という厄介なものをやつつけ、龍之介としばらく電話した後には既に時刻は一〇時二〇分を示していた。

「そろそろ行くか……」

いつからか俺は眠るという表現を使わなくなっていた。

俺にとって眠るという行為は既に休憩の意味ではなくなっており、現実の世界から離れあの残酷な世界を向かう——いわば電車に乗るようなものだ。

ま、睡魔に抗い続けるなんてことはできないから、いつかは必ず乗ることになる強引な電車だけだな。

俺は自嘲気味にそう思いながらベッドの上で仰向けに寝る。隣接する部屋から微かな笑い声が聞こえたが、それも徐々に遠のき、俺は——

目覚めると俺は黒いロングコートを纏って、半壊したアパートの残骸に佇んでいた。

視界にはとても現実をベースとしているとは思えぬ荒涼とした殺風景な光景が広がり、現実と同じ姿の建物は一つも見当たらない。空は低く陰鬱となりどことなく薄暗く、荒んだ風が頬を撫でた。

「インヴァギート、だな」

いつもと変わらぬその風景を目にし、俺はポツリと世界の名を漏らした。

この世界では現実にあるモノが廃墟同然の姿に成り果てるか、または瓦礫となって原型すらも留めていないかのどちらかだ。

アパートは原型を留めてはいるも、既に二階はごっそり消失しており俺の部屋は消え去っていた。残っていたところで私物は一切排除されていただろうが。

北のほうへ視線を向ける。城壁に囲われた都市が走れば一分もかからない距離に屹立しており、俺は都市を目指し走り始めた。

北門から夢都市へと入り大通りを抜けて路地へと歩をヒデオめてゆき、真っ先に俺が小休憩に使う宿屋――を兼ねている酒場へと立ち寄る。

「らっしゃい！」

店長――もといマスターは本気でマスターと呼ばれるつもりがあるのか、八百屋を彷彿とさせる快濶な挨拶を飛ばしてきた。

「なんだあんたか。今日はちょっと来るのは早いね。開店したと同時間なんて……まさかあたしの隠れファン？」

「隠れ以前に隠れてないファンもないだろ」

「冗談の通じない奴だねえ……。とくにあんた宛の手紙は届いてないよ」

インヴァギートでは携帯なる便利科学があるはずもなく、それを新たに作る技術も部品もないため何かあれば手紙でのやり取りが基本である。しかし手紙を送るにしても先方の住処が知らなければ送れない、そんなわけで夢想者たちは概して定住先が存在するのだ。

俺はこの酒場の二階。無理に作った感じビンビンな六畳一間もない宿を借りている。他にも部屋はあるが物置と化しており、宿屋としての客は完全に俺一人の状態となっていた。

「そうか。じゃ」

手紙が届いているか否かを確認するために寄っただけなので、俺はとくにそれ以上の用事もなく身を翻したが、

「ところでビデオ。あんだ、可愛い女の子をゲットしたんだって？」
「どこでそんな誤情報を……」

「商人を舐めちゃいけないねえ。これはあたしの親切心だよ、受け取っておきな」

カウンターにすいと置かれた小瓶には、緑色の明らかに身体へ悪影響を及ぼしそうな液体が見えた。俺は怪訝な顔を浮かべつつも、それを受け取る。

「なんだこれ。新しい回復薬……か？」

ここの商品は基本的に回復薬オンリーだ。この世界では怪我をするということはなく、RPGの如くHP的なものが設定してありそれを全損すると死亡。という何ともわかりやすいシステムが構築されているのだ。

当然回復薬とはそのHP的なものを回復する役割があり、この酒場以外にも回復薬を売って生業としている店は多くある。

「それは最近入荷した近畿地方にのみ存在するといわれる野苺っぱい何か、確か苺苺とか何とかいう名前のやつを調合して作った……ラブホ的雰囲気を作る発光薬ツツツ!!」

「努力のベクトルが完全におかしい！」

「一滴でもどこかに垂らすと、たちまちその部分からピンク色の仄かな光が生まれる優れものさ。ただし全部垂らすなよ。良い雰囲気になったところをピンク色の閃光手榴弾で台無しにするようなものだからね」

「要するに配分間違えた試作品を寄越したってことかよ……」

と文句は言いつつも貰えるモノは貰っとく性分である俺は、一応（本当に使い道が思い浮かばない）腰のポーチに収めておく。

「もしこれで上手く行ったら『これのおかげで彼女ができましたー！』って宣伝してよね」

そんな注文を無視して俺はそそくさと店を出た。確かに可愛い女の子とは出会ったが、その前に『疑惑の』と付くので俺としては全く嬉しくない。

「さて、その『可愛い女の子』に会いにいきなきやな……」

俺は自嘲気味な笑みを浮かべ、入り組んだ路地を歩いてゆく。

昨日、俺はウルフの陰謀(?)によりミカとコンビを組まされ、今後ミカと俺はともに活動するということになりお互いの根城を教える。

俺はインヴァギートにきたら真っ先にミカの根城へ訪れると約束し、まだ色々と言いたいことがありそうなミカと別れたのだ。

確かミカの泊まる宿はこっちだったはずだが……。

と、しばらく走り書きの地図が描かれたメモを見ながら路地を歩いていると、俺は一軒の宿屋を見つけた。

「ここ、だよな」

掲げられた看板とメモを見比べながら、現実のアパートより綺麗ってどういうことだおい……。とその瀟洒な外観にちよつと驚きつつ扉を開けお邪魔した。

「いらっしやいませ」

入るや否やカウンターに佇む女性が俺のほうを向いて慇懃に一礼し、なぜか眉をひそめ困惑顔を浮かべた。

「お客様。こちらは女性専用の宿となっていますが」

言われ俺は一階を見渡す。桜色を基調としたインヴァギートでは珍しい明るめの雰囲気で、小奇麗なソファが洒落たテーブルを挟み対になって鎮座している。……確かに女性向けのレイアウトだ。

へえ……そんなのあったのか。と多少感嘆しながら、俺はカウンターに歩み寄り、

「ここに泊まっているミカって奴の知り合いだ。本人のサインもある」

俺はメモと一緒に渡された俺の入室を許可するという旨が記されたサイン付きの種類を見せた。それを見てなおも二〇代前後の女性は渋ったが、

「義勇夢解析兵団のかたですか？」

俺の服装——義勇夢解析兵団の制服である特徴的なデザインの口

ングコートを見詰め、女性は問い掛けてきた。

「そうだけど」

「……以前お世話になりました。何か理由があるのでしょうか、本来ならもっと手続きを踏んでもらうのですが、今回に限り省略しましょう……ミカ様の部屋は一〇三号室になります」

「どうも」

礼を言っただけで俺は近くにある階段を上る。この宿屋は吹き抜けになっており、二階から一階が見下ろせるようになっていた。不意に俺が木の柵から顔を覗かせ一階を見やると、カウンターに佇む警戒心バリバリの視線をこちらに送っていたお姉さんが即座に目を逸らした。

「事前にこういう場所だっけってくれよな……」

この場にはいないミカにぼやきつつ、俺は言われた通りの一〇三号室へと歩をヒデオめる。あの酒場の二階と違い、木板を踏む度にギシギシという軋みを上げることはなく、思わず俺も住みたくなるような快適さが廊下の時点であった。

「ここか」

ドアに掲げられた番号札を見て、俺はノックをする。

しかし待てど待てども返事はない。仕方なく俺は、

「【開錠（unlock 0070128539）】」

事前に教えられていた開錠魔術を唱え部屋の鍵を勝手に開けた。

この世界には魔術という不思議な力が存在する。魔術は詠唱によってある種の力を発することができ、戦い以外の私生活においても多用されている。そんなわけで俺は魔術の力を借り女性の部屋の鍵を開錠したのだ。

誤解なきよう言っておくが、ミカが「あたしがいないときは部屋に入っただけ」と言ってきたのでそうさせてもらっただけに過ぎない。おそらくこの男子禁制という風の宿屋の廊下に、ぽつねんと男が部屋の前で立っているほうが問題なのだろう。

「お邪魔します」

俺は部屋に入って真っ先に目を瞠った。

「風呂がある……だ、と……!？」

玄関に入って歩幅四歩程度ヒデオんだそのすぐ脇。一段高く備えられた場所にはマットが敷かれ、簡易的脱衣所らしきものが見えた。現実ならば決して立派な浴場ではないだろう。俺のアパートにだって似通ったものがある。しかし、だがしかしこのインヴァギートは身体が汚れても自然に綺麗になってゆくというその特性上、入浴できる場所は限りがある。

加えてインヴァギートでは「えっ? お前男のくせに風呂に入りたいとか言ってるの? そんな無駄なことしてる暇があるんなら汗水垂らして己を鍛えろよ」的な風潮があり、例えば大浴場があったとしてもそこはほぼ女性専用。

ゆえに俺はかつて一度しかインヴァギートで風呂に入ったことはない。しかしその一回では俺はすっかり『夢の中で風呂に入る』という行為の虜となり、以降期を図っては幾度か風呂に入ろうと試みるも尽く失敗に終わり、俺はあの一度の魅力を感じて以来インヴァギートで風呂へ入った覚えはない。

「くっ……!」

俺は思わず歯噛みした。

入りたい、風呂に入りたい!

しかしここは他人の、しかも女性の部屋だ。本人不在中に入室するというだけでも紳士に反する行動なのに、勝手に浴室を借りるなど男としていかなものか。

だがそういった男女の枠組みに縛られ、何度入浴することを断念したか。そのような紳士だからという理念に囚われるこそ一種の男女差別であり、俺は何か間違った思想で己の首を絞めているのではないだろうか。

それにここは他人の部屋ではなく今後活動をとにするパートナ―の部屋。ならば浴室を借りることも一概に『悪』とは言えぬのではないだろうか。そうだ、俺は決して男女差別をせず彼女をパート

玄関でブーツを脱ぎ踵を揃えながら置いた俺は、前方の廊下――その先にある小奇麗なりビングを無視し、左回りをして脱衣所に一歩足を踏み入れる。

インヴァギートは常に肌寒い感覚があり、唯一解放されるのがあの浴槽の中に身を入れたそのときのみ。俺はその感覚こそが魅力だと感じ虜になっているのだ。

「……は？」

水の滴る半透明な髪は硝子のように一種の芸術性すら感じ思わず見惚れてしまう。しかし衣服を着ているさいも思ったが年齢に反しその乳房の膨らみは非常に残念で、天は二物を与えずという言葉が思考を過ぎった。

「これでお相子だな」

がっこーん！ というわりと洒落にならない打撃音とともに、素晴らしきアッパーが全裸の俺を宙に浮かせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8892y/>

夢世界 —インヴァギートー

2011年12月1日22時54分発行